明治浪曼文學史

日夏耿之介

日夏耿之介 著

明治浪漫文学史

中央公論社

昭和二十六年八月三十日　初版發行
昭和四十三年十一月三十日　再版發行

明治浪曼文學史　©一九五一
定價一八〇〇圓

著者　日夏耿之介
發行者　山越豐
印刷者　山元正宜

發行所　東京都中央區京橋二丁目一番地
中央公論社
電話（五六一）五九二一
振替口座東京三四番

明治浪曼文學史敍

夫の明治卅年代の蓮翹的浪曼文學の恣まなる感化を唯いつぱいに自らこの身に受けてわたくしは人となつた。初めは人皆爾るやうに、博文館本の兒雷也と西遊記との幻夢に出立し、中學時代には帝國文學的空氣のなか、大學時代には早稻田文學的空氣のなかにまのあたり自らをゐた。そのどちらにも異端であつたやうに回憶せられ、どちらからも詩恩文惠をそくばくは承けて來たと自覺せられる。が、それ以前、やや早熟のわたくしは、十二三歳から明星、帝國文學、國文學、日本美術、太陽等を讀んでゐたので、明治三十四・五・六年の頃に於ける明星派の運動を耳にし目に見て得た間接の印象の方が、稚い感受性に空想が多分に加はつて、それ故に杳かに純粹で且强烈であつた。のちにそれらは、青年わたくしの心の中でやうやく反省整理し初められたが、その回顧はいつまでも冬の爐邊のぬく火のやうにわたくしにとつて喧く且甘かつた。

在郷最後の卅六年といふ歳に紅葉山人が逝り、上京した卅七年三月末から半月を經ぬに、正太夫綠雨が本所横網にこまかな小格子がたてにながれ下る陋屋で病死して、僕本月本日を以て目出度死去致候間此段謹告仕候也の死して尙スコタンな死亡廣告とはなつた。

浪曼派からは全面的に影響を承け、又自然派からはかなり批判的に感化を受けた。自分が自然派の牙城早稻田のなかにゐるので、十分これに批判的であることを要するやうな自戒の用心が些しはあつたのであらう。併し、藝術に對する一種のピュウリタン風な（描くことは狎褻を忌まぬ乍ら）素朴な態度は、自然派のまことに好もしい印象であつた。同時に、已に浪曼派的影響の自己批判を營みつつ、わたくしは自己を歷史の奈邊に彳立せしむべきかに就て、考慮しなければならない時が再三あつたと記憶せられる。それから既に四十年近くの歳月が茫茸として流れ去つてしまつた。まことに速い時間の步度であつた。

それ故に、この度本著を書きおとすにあたつて、詩と晶子との章を除いては、新らしく書き下したるものであるから、批判的自己をば自覺しながら、老の身ながらも、一味回憶の甘える情にふと囚へられざるを得なかつた。この書が、記錄的文學史と批判的文學史論との中間的な性質をも含むものとなつたのは、わたくしの心緒にとつてのみはいとせめて自然であつた。もう再びこの小土の上に束の間起つて、五月の少女風のやうに消え去つた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

浪曼派文學を記述する幸福な折は恐らく又とあるまい。

しからば著者にとつて、高下淺深の心理を包藏し逝つた明治浪曼派の詩文人は、一一に之れ、いちひどい生の火花の間に偶ま見えたる、却々に忘れ難いゆゆしき思ひ出の人々であり、而もはつかに廿年にも足らぬ歳月といへど、その間、母地球はその性急な音もなき自轉の間、夥しい善惡美醜の顯晦の跡を太虛ふかく刻みに刻み込んだのであつた。今やわたくしは、このささやかな自傳的アクセント如きものすら心のおくに微感せられる疏略疏漫な史敍を擱いて、偏宕孤僻の短筆、よくギイメントな江湖に納れられるか若何かを少々疑はざるを得ない。恐らくは、古風な、故ら神經を形態に較や泥み寄せすぎるたぐひの漫漶せる湮滅的古詩謠のそこはかとなき摸搨にもつばら浸り切つて、せめて心の奥がに銀の音に冴ゆる沈み勝ちなる靜閑の日々を姑らくおくらうかととつおいつ考へあぐんでゐる。この輓近の地球星は、わたくしのかたくなにして悲哀にみちた心曲にとつては、ただ俚淺にして而もかしましきにすぎる。

昭和廿六辛卯歳三月初四

皇都阿佐ヶ谷第四街月黃聽雪廬に於て

阮光以しるす

扉　字　著　者

表紙カット　詩歌集『毒草』挿畫

（藤島武二筆）より

明治浪曼文學史序次

敍

第一章　浪曼文學の序說

第一節　樂園の破片……一三

第二節　世界浪曼者……一九

第三節　明治浪曼文學の出立……二三

第四節　近代我の自覺……三〇

第五節　三つの發明……三三

第六節　『卽興詩人』……三七

第二章　詩——浪曼派初期

第一節　浪曼的詩文……四五

第二節　空間的時間的……四七

第三節　散文の浪曼性……四九

第四節　形式への無知……五三

第五節　膚淺なリアリスト……五四
第六節　キリスト教……五六
第七節　その前夜……五八
第八節　悲慘なる最後……六四

第三章　詩——浪曼派中期

第一節　母胎……七一
第二節　精神の不羈束……七三
第三節　擬古浪曼派……七五
第四節　世界主義の廣袤……七八
第五節　シュトリッヒとグリアスンと……八一
第六節　新感情……八六
第七節　藤村の垢……八八
第八節　稚氣のトレランス……九三
第九節　晩翠とシラアと……九八
第十節　日本を去る詩……一〇〇
第十一節　山林の自由……一〇四

第十二節　素朴エキゾティシズム……一一〇
第十三節　空想社會主義……一一五
第十四節　中期終末の意味……一一九

第四章　詩——浪曼派後期

第一節　開　花　期……一二一
第二節　美文といふ散文詩……一二五
第三節　視官能的豪奢……一三〇
第四節　音樂の節奏……一三四
第五節　音　數　律……一三九
第六節　古典的浪曼詩……一四一
第七節　挿畫と青木繁と……一四五
第八節　唱歌的行方……一四六
第九節　雲の王座……一四八
第十節　妖　魅……一五三
第十一節　闇の盃盤……一五七
第十二節　非力の詩人……一六二

第十三節　新らしき浦島……一六六
第十四節　敎門の詩……一六八
第十五節　諸詩人……一七五
第十六節　泣菫・有明……一八一
第十七節　文庫派の淸白……一八五
第十八節　東洋浪曼詩……一九一
第五章　歌——明星派運動
第一節　宮廷サロン歌人……一九五
第二節　スカラア・ポエット萩之家……一九九
第三節　鐵幹新詩社を起す……二〇一
第四節　零丁の少年詩人……二〇八
第五節　新詩社同人……二一〇
第六章　『みだれ髪』の空想的感覺
第一節　ボオン・ロマンティック……二一七
第二節　高師の濱乙女……二一八
第三節　コントロヴァシイ……二二〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四節　桃花の罪……二三三
第五節　神の連聲……二三六
第六節　さびしからずや……二三八
第七節　美の感覺至上……二三三

第七章　散文形式の浪曼主義

第一節　大衆文學の浪曼性……二三九
第二節　リアリストの浪曼分子……二四二
第三節　外國文學の新鮮……二四六
第四節　『卽興詩人』……二四八
第五節　『水沫集』と雅文小說と……二五一
第六節　「墮落の極」……二五五
第七節　兆民・子規……二五九
第八節　歷史小說のロマンティック……二六一
第九節　小說學校撥鬢科敎則……二六七
第十節　拙文の名調……二七〇
第十一節　鏡花登場……二七四

第十二節　文體の諸問題……二七八
第十三節　浪曼人物の半代記……二八四
第十四節　露伴談怪……二八八
第十五節　二元論の人生觀……二九一
第十六節　お伽文學と翻譯と……二九四
第十七節　獨歩吟客……二九八
第十八節　感傷子……三〇三
第十九節　回舊殉情……三〇五
第二十節　文明批評家……三〇七
第廿一節　怪談二種……三〇九
第廿二節　美的生活……三一二
第廿三節　漢詩文の浪曼者……三一八
第廿四節　煩悶——社會的事實……三二三
第廿五節　徂徊派と漱石と……三二三
第廿六節　未明・三重吉……三三九
第廿七節　浪曼的荷風……三四三

第八章　『高野聖』の比較文學的考察

第一節　舊ロマンティシズム……三四八
第二節　『高野聖』……三五一
第三節　モデル……三五三
第四節　怪の心理……三五七
第五節　キュリオシティ・ハンティング……三五九
第六節　老人化猿……三六二
第七節　「はなし」……三六四
第八節　人怪のけじめ……三六八
第九節　不思議……三七一
第十節　鬼才……三七四
第十一節　女仙譚……三七八
第十二節　常識の框……三八一
第十三節　ドウルヴィリイ……三八三
第十四節　幸福な魚……三八九
第十五節　グルモン的批判……三九三

第十六節　別　天　地……三九六
第九章　明治浪曼派の結末
第一節　二大標目……四〇一
第二節　生の夜宴……四〇六
索　引……四一一

口繪及挿圖

泉鏡花・與謝野晶子肖像……口繪一
「白百合」・「文學界」・「明星」と
初版本『卽興詩人』と「めさまし草」掲載の「卽興詩人」……〃二
新小說「高野聖」口繪（梶田半古筆）と初版本『高野聖』……〃三
詩歌集『鐵幹子』とその挿畫（一條成美筆）・歌集『みだれ髪』と
その挿畫（藤島武二筆）・詩歌集『毒草』……〃四
國木田獨步肖像……二九九
小泉八雲肖像……三三三
藤村操「巖頭の感」……三三四
夏目漱石肖像……三三六

第一章　浪曼文學の序說

第一節　樂園の破片（かけら）

言葉は行動を產むが、ゲエテの言葉は石胎であつたとハイネが曾て一たび云つた。

この詩人の書き遺した浪曼派論は、偏見にも憎惡にも充ちてはゐるが、詩人的直觀を間々率直に吐露した條り條りが多くて洵におもしろい本である。併し正規の文學史としては喰ひ足らない。面と對つては、如何にゲミュート（獨逸人がいふ）に於て親しくて、サンシビリテ（佛蘭西人がいふ）に於ても親しい近代文學的西洋の諸國といふものではあつても、われらはもと東洋人である。生粹正統の東方人といふものである。ゲエテが一たび中土阿剌比亞に詩眼をそそいで印度へは背を向けたのは、「イズラムに改宗した邪宗門」などと浪曼派は惡言を發したけれども、彼としては至極尤ものことで、印度まで杳々ゲダンケンの履物で出かけたのはかの浪曼的なるショウペンハウエル哲學であつた。ゲエテは不毛石胎でない所か、驚くべき行ひの道の子孫をも生みなした言葉をば拵へた偉大なる異邦人で、つまり世界人であり、而して又同時にまぎれもない獨逸人として、あの兜を被つた

獨逸文字でンやヒがつよくひびく獨逸の詩（ポエジイ）を書いたディヒタアといふものであつた。それをしも石女というたのは、シラアの行爲的文字に對立させたのと、いま一つ實はゲエテの作つたピグマリオン原作の雕像には、作者自身が戀をまづして、その唇にわが唇を接して生氣を吹き込んだといふことを云ひたかつたからに外ならない。且またハイネは、この書をば、本國人よりも先きに佛蘭西人に向つて書いたのであつた。

バイロン、といふ名は一たび古くて、二十世紀に入つて再び新らしいひびきある名で、ゲエテはマンフレッドとファウストとの類比をよくよく知つて尙且十分好いてゐた。ゲエテには、ああいふキャタストロフの結末は、ああいふ主題の作品としては到底させ得ないが、これを肯へてする英人貴族をいたく好むといふ心理は、彼としてまことに自然であつた。

マンフレッド。老宿、死ぬるといふこと、さしてむづかしいことではないて。

といふ第四場の幕切のこのセリフは、最近逝つたジイドが偶ま全く同じ組立ての言葉を吐いて死んだことを、その友演出家俳優ジャン・ルヰ・バロオが報告してゐるが、メエル・リヒトといふやうな象徵的な言葉でないにしても、窓をあけて明るくせいというて死んだゲエテにしても、構へて得發語すまじき言葉であつた。バイロンは（ジイドのことはここでは云はない）マンフレッドと共に生き、マンフレッドはバイロンと共に希臘獨立戰中に陣歿した。このピグマリオン王は、マンフレッドといふ己が影のやうな狂伯爵に、天壤間には哲學で思量する埒外の事もあるぞといふことを敎へる爲にあの劇詩を書いたが、かういふ事を現實で營んでゐるかのごとく思惟幻想する時間を多く持つてゐたのが西洋浪曼派の詩人等で、今日の敗戰後の功利的日本人が四つの小さい島でせせ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com